

かに、淋し氣な笑顔をちらりとされるかう様に、私は、お話しなどしなくても、何かわかり合ふやうに思へますし、なまじつか、くだらなくおしゃべりして、お氣持を亂したくもないと思つたりするのでした。

去年きよねんの十二月頃でしたか、やはり東京に來られたとき、その前お遇ひしてから僅か四ヶ月足らずでしたのに、前髪に白いものが多くなつて居り、思はず眼を伏せたのでした。

そのころ丁度、映畫「ハワイ・マレー沖海戦」が上映されてゐるといふ噂うわさで、私は御一緒にそれを觀ようと、池袋の映畫街を歩き、その大きな廣告のかゝつてゐるある小舎やに入りました。

ところがそこでは、大卷もの、「忠臣藏」がかゝつて居たのです。平生あまり映畫を見つけない私は、粗忽そとつにも、來週の上映もの、廣告と、見當違ひしてゐたのでした。

それでもかまはないから、と何度も云はれるまゝに、二人は並んでその銀幕ぎんまくに吸

ひつけられ、吉良上野介の奸智かんちにたけたふるまひや、その後、大石良雄が途中いろいろな障害せうがいに遇ひ乍ら、たゞ一筋の義のために、それを切り抜けて進むあたりの息づまる場面に、かう様は何度もくため息のやうにも太い息を吐いてゐられました。が、吐くその息の一つ一つが、何を意味するのか、私の胸にも一本の線のやうに傳はつてくるのでした。

四十七士にも何か通ずる四十九勇士の名は決して偶然ぐうぜんではなく、その勇士一人一人の胸に、赤穂の義士達の決意と全く同じに深いものが藏されてゐたことを、私は知つて居ります。

ふと、布哇攻撃前夜まで、勇士達が母艦上で、氣勢きせいを上げつゝ歌つたといふ布哇攻撃節を思ひ出しました。これは歸還荒鷺からぢかに聞いたものですが、かう様も清様の遺品ひんちゆう中にあつたとかで、やはりその歌を知つてゐられました。

一、大事決して鳴る腕かくし

しばし美人の膝枕ひざまくら

夢で笑つた内藏之助

二、氷る太洋の吹雪を突いて

荒海乗り出す戦艦

めざす布哇は夏とやら

三、男、度胸は奇襲のいくさ

ひよどり越えに桶狭間

明日は布哇に弾の雨

白頭山節で歌ふと聞かされてゐて、私も幕間に口の中で誦み乍ら、元祿と昭和の、一筋の忠義に生きようとする義士達の思ひを想ひ、いまの畫面の迫ってくるものなかに、四十九勇士達の壯絶さを思はないではられませんでした。

と、突然、

「吉良上野介でなくて、ほんとによごさいました。」

まるで一粒の雨のやうな、かう様の言葉でしたが、その雨粒は、私の胸のなかにだんくと大きな波紋を擴げてきました。

かう様の、この一年間のたゞ一筋に亡き清さんを憶ふ母心は、僅かの間に髪に白いものをおき、接する人の胸をしめつけるのでしたが、いまその同じひとは、赤穂四十七士に通ずる息子達の心情に思ひを馳せ、震へるやうな感動に、何か雄々しいものを掴んでゐるやうに思へるのです。

お別れしてから、私への手紙のなかにこのやうな一節がありました。

「——あの映畫をみて、私は本當に何とも云へない思ひにうたれました。久方振りに、眼の前の雲がすつかりとれて晴々と心が輝き渡つたやうでございませす。

思へば、あれほどの死場所を得て、立派にお役に立たせて戴いたわが子の死を、

私は賞めこそすれ、決して悲しんでなどゐない積りでをりながら、白髪が増えたと仰せられたときは、意氣地のない自分に我ながら、ほんとうにお恥しうございまして。

月日の経つのは早いもので、あれからもう一年と一ヶ月、べん／＼とその日を送り迎へたことに氣付き、我ながら心の至らなかつたことを反省致してをります。年も改まり、今年こそは何か意義のある仕事をと思つてをります。

そのうち御越し下さいます由、御待ち申して居ります。遺品中の日記やその他お目にかけての品もございまして――。

私はお約束しながらつひにそれつきり伺はずに居ります。日記なども、だから見せて頂く機会がなく、こゝから讀者の皆様と兩方へ御詫びする次第ですが、かう母堂の深い悲しみに徹しながら、ひたすらそのなかから立上らうとなさる姿に、私は限らない親しさを感じるのです。

それでいゝんではないでせうか、かう様。あなたの白髪は再び黒くなることはな

いかもしれませんが、あなたがすでに決意なされたやうに、その悲しみから決然と立上つたときの、深い母心こそ、私はまたと得られない尊いものだと思ふのでございます。

瀬戸内の母

—東太平洋作戦、酒井一郎一等飛行兵曹とその母—

瀬戸内の町

庭樹の花のつぼみもふくらんだ三月の末、私は遺族訪問のうち、一番遠い中國から九州地への旅をはたさうと、或る朝東京を發ちました。

東海道線から山陽線の長い汽車の旅を岡山で降り、あわたしく發車間近い宇野行に乗り換へました。

小さな何となくごみ／＼と混雜した汽車ですが、紫紺のお揃ひの防空服裝で、勤勞奉仕にでもゆくらしい婦人の一團や、幾人もの子供を連れて、大きなトランクを持つた、歸省でもするやうな夫婦者などとり／＼の人達、お國訛りもさまざまに、やはり瀬戸内海をわたつて四國と結ぶ路線らしい、彩りがみられるのでした。

一時間あまりで終點の宇野につき、満員だつた汽車の人達が、ひどく急いだ風に下車するなかを、私ももまれながら驛前に出ました。

驛の左の前側が、青い海のものぞかれる港になつてゐて、近海通ひらしい汽船が、二つ三つそこに入つてをり、棧橋にも横付けになつてゐます。驛からそこまでの長い歩廊に、子供を負ふつた女達や、國民服の産業戦士やが、ぎつしりと竝んで、半分駆け足でいそぐ。みんなその船に乗つて、四國にわたる人達でせう。

これがはじめてみる瀬戸内海！ 私は寫眞でしか知らない、そして頭に描いてゐる瀬戸内の美しい風景が、すぐそこに展がつてでもゐるかのやうに、道路に立つて、何度も背のびしてみるのでした。

しかし、低く狭い視線には、僅かに左寄りの、二つ三つ、くつきりした濃緑の島が望めるだけで、私は、その向ふに連つてゐるであらう廣い海と幾つかの美しい島影をひとりで想像してみるのでした。

驛から正面へ眞すぐの道の右側は、廻送店や、軒の低い宿屋や、のれんのぶら下

つた食べものやなどが竝んでゐます。その何となく港町らしい風景に、私ははるけくも訪ねてゐたものに巡りあつたやうな、やるせない旅愁を覚えるのでした。

時間のうち合せがうまくつかず、一人でそこから一里ばかり離れた市内田井の、酒井正一様宅を訪ねて行きました。

そこは、市内とは名のみで、本道の両側には田や畑が連り、廣い眺めが山の果まで續いた緑の村落です。

酒井正一様とまつえ様の長男、酒井一郎一等飛行兵曹が、東太平洋ミッドウエー強襲戦で、立派な手柄を樹てられたといふことを聞いてをりました。

山口、加來兩提督を失つた東太平洋作戦の壯烈な戦は、あれから一年経つた今も、私達を悲憤の中にひき入れます。

昭和十六年十二月八日の開戦初頭から、わが海軍の奮戦ぶりは、僅か半歳の間、米・英・蘭の海軍を、西太平洋の全海域から葬りさり、十七年六月には突如、その鋒先は東太平洋方面に向けられました。

その當時のアメリカは、戦艦の殆んどと、航空母艦も半分以上は撃沈破されてゐて、僅かに數隻の艦が主力となつてをり、わが方としてはそれだけは何としても撃滅してしまはなければなりませんでした。

六月五日、ミッドウエー島附近の海域は、東南東の風が強く、厚い雲層が二千メートルの上空に立ちこめてゐて、この方面にいつもある大きな長濤のなかで、わが母艦はひどく揺れつゞけ、艦に積まれてゐる飛行機が飛びあがるのにさへ困難なほどでした。

しかしわが海軍達は、山口多聞中將の指揮のもとに、仇敵撃滅の意氣に燃えつゝ、一大作戦を繰りひろげました。

この戦ひでは、敵の反撃がもつともひどく、戦果は珊瑚海々戦以來一月ぶりに、敵の航空母艦二隻と甲型巡洋艦一隻とを撃沈し、また敵機も百五十機を撃滅するといふ、まことに誇らしいものでしたが、わが方もまた空母一隻を喪ひ、一隻大破、巡洋艦一隻大破、さらに還らざる飛行機三十五機といふ、一艦一殺の壯烈な刺し違

へ戦法をとつたものでした。

この特殊な壮烈な激戦に雄々しくも勇戦して、艦と運命を共にしたといふ歳若い空軍の勇士に、私たちは敬虔な祈りと感謝を捧げずにはゐられませんでした。

薪割錬成

「これは、これは、こんな邊鄙なところに、ほんまにようお出で、つかあさりました。」

したしい調子の中國訛りと、にこやかな顔で迎へて下さつたお母さんは、四十五六歳のお方でした。

數年前まで料理屋をしてゐたといふ廣い家に、病身のやうな心もち青ざめた顔としつかり者らしく眉のきりりとしたところがその言葉つきとともに、何となく人形

芝居の世話女房にあるやうな感じの方でした。

「なんの、なんの、あの子一人ぐらゐではびくともせえしませんですん。」

あとにまだふたり、息子がをりますけえの――、みなああさん（兄さん）のあとを嗣ぐといふてゐます。」

まつ先に、かう口を切られるお母さんの調子は、から元氣とは見えない、軍國の母とはこのやうな人をいふのだらうかとさへ思へるのでした。

一郎さんはその頃の小学校高等科を出ると、母親に飛行兵志願を打ち明けました。

田井の國民學校は、その時分から先輩に何人かの少年飛行兵を出してをり、受験に熱心な松岡先生の指導で、一郎少年の胸もただ大空へと沸きたつてゐました。

まつえさんは、兄弟四人が全部軍人揃ひといふ家に育つたので、いま自分の子供のこの申出にすつかり喜び、一も二もなく賛成しました。しかしこの場合にも、果してこの子が最後までやり抜いてゆくだらうか、とそればかりが心配なつたさうで

す。

最初、陸軍飛行兵を受け、胸圍で不合格になつてすつかりふさぎこんでしまつた一郎さんを、兩親はなだめはげまし、いろ／＼と先々の對策を考へてやるのでした。

何としても頑丈な身體を作らんことには――翌る日から、母と子の一すじのいとなみがはじめられました。

このお宅から南へ向つて、やはり瀬戸内の海に續く道の右手にちよつと高い山があります。和靈山といつて、山頂には氏神様和靈神社が祀つてあり、土地の人々の深い信仰の的となつてゐます。

一郎さんはまづ、この神社への日參を考へました。澄んだ朝の空氣を吸つて、ラニングシャツ一枚になり山頂まで登りつめる。そこからは美しい内海が、點々とした島をうつして、二つ三つの白帆が朝の光りに小さく明るくかゞやいてゐます。一郎さんはその景色のやうに美しい心になつて、社の御前に一つのことを祈念し、

また駄足で降りてくるのが日課の一つでした。

田井は宇野町と玉町とが合併されて、いまの玉野市になる數年前には、小さな村落に過ぎませんでした。田園の感じは今も昔も同じで、このあたりを、半圓を描いて舗装された縣道が遠くへ伸び、酒井さんのお宅の店先からみると、東の方の山の端から白いバスが、おもちゃのやうに走つて、こちらへやつてくるのです。こゝからはるかに見透しがきくやうに、やはりそのバスの方からもこのうちは緑の中に一つの目標のやうにくつきりとうつゝてゐることです。

少し前まで、宿屋と料理屋とを兼ねてゐたさうで、二階建のどつしりとした何十年も前の建物らしく、黒光りする柱や廊下と、それからいかにも田舎らしく、物置や、臺所あたりが広い敷地のなかでゆつたりとしてゐます。

幾つかの客間のすぐ裏が、低い石垣になつてゐて、そこを上ると小さな梅の木が何本か植つた、畑のやうなあき地のやうな所になります。

まつえさんは、私を案内してくれながら、

「こゝでございますん。何卒みて下さいませ。いまでもこゝのところだけは、どうやつても掘りかへす氣いなれんですけえに。」

と、なにか感慨ぶかさうに立たれたのでした。

一郎さんが試験に落ちたころのある日、何を思つたかお母さんは、太い薪を二年のあいだ使ふくらゐ、たくさんに買ひ込まれました。

——胸幅を増したきや、かういふ仕事にかぎる、すこしこたへるわざだが、なに男の子が——、

ひとりごとをいひながらお母さんは薪をその畑の片隅にうづ高く積み上げました。

その日から一郎さんの薪割生活がはじまりました。

頭からがんと照りつける土用の日中も、指先がこぼえてしまふやうな冬の日も、毎日そこへ立つて、か細い身體で重い薪割を振りあげるのでした。

なれない仕事に、手のひらには肉刺ができ、腕が曲げられない程に痛みました。

「これで試験が通るなら——」

齒を喰ひしばつて、来る日も来る日も、一郎さんはその空地に立ちつゞけました。

お母さんは、何度もそこへやつてきて、後姿に聲をかけます。

「だいぶ腕がしつかりしてきたの——」

「昨日よりずいぶんたくさん出来たけに、さあもうすこしやりんさい。」

雪のしん／＼降りやまない日にも、いつの間にか、そのあき地の方からバンバンと薪割の音がきこえてきます。お母さんも立ち上りました。簑を着た腰をかゞめると、割れたはしから束ねたり積んだり、いつまでも一郎さんの傍について無言の激励をするのでした。

夜は學科の準備です。乙種第八期生といふから、その頃はまた採用者の人員も尠く十何人か一人の合格率で、海軍の少年飛行兵は全國小學校の秀才連中に難關中

の難關なんくわんとされてゐました。

朝の駆足登山、日中は土工のやうな力仕事、そして夜は、ノートと取りくむのです。

「——蚊帳かやのなかにの——夏になると、あの子は机つくえを毎晩入れよりましたん。みんな寝しづまつてもまだ、二階かひからはあかりが見えよるんで、わたしは、何なん度も上つていつたもんです。」

幾度も手拭てぬぐひを冷たくしていつたり、冷たい飲物を運はんだりされました。

あまりおそくなるると、お母さんは一郎さんの身體からだを案じられるのでしたが、

「——いんや、お母さんははやうねてつかあさい。この問題もんだいさへといたら寝るんけ。」

一郎さんはお母さんに心配しんぱいかけないやうに、いつもさういふのでした。

「——自分のやうな阿呆あほうな人間にもかういふ息子ができた。こんなしあわせな者ものはないん。」

身體も隆々と見ちがへるばかりになつて一郎さんが合格したときに、お母さんはかういつてしみくくと泣かれたといふことです。

きつと、一郎さんはそのとき、心こころでかういつたことでせう。

「——自分じぶんのやうな者も、このお母さんのおかげで受かつたんや。こんなしあわせな息子もないん。」

お迎へ飛行

入隊にょたいしてから、たまに歸省する一郎さんは、他の練習生と同じやうに、眼めに見えて立派りっぱになつてゆきました。

うち中で團欒だんらんの食膳を圍むとき、父上はしが箸はしをとるまで決して手をつけない。弟妹たちをととても可愛かわいがり、入隊前のやうに手を上げたりなどしない——。お母さんば

そのやうに身も心も成長して歸つてくるわが子を見るにつけても、海軍航空隊の立派な教育に感心するばかりであつたと、しみじみ述懐してゐられます。

そのころ支那事變の緊迫した情勢に、この里からも、つぎ／＼と應召者を出し、赤たすきをかけて、勇ましく軍歌に送られる人々の群に、ことに軍國の一族としてこの家の御夫婦はじつとしてゐられない思ひで、愛しい息子の雄々しい日常を考へては自分たちの生活をひと倍反省してゐるのでした。

——何も自分たちには落度がない。先祖から受けついで家業を忠實に守つてゐるのだもの——さう考へればそれまでですが、それだけでは何としても割り切れないものが残つてゐたのでせう。

轉業も企業整備もまだ口の端に上らない支那事變の始め——このお宅は料理屋と旅館の看板を敢然と返納してしまひました。

さつぱりした思ひで、それからは魚屋一方に精を出し、御夫婦と老母は、あと一

郎さんと二つ違ひの姉上正子さん、續く正さん、一政さんの二人の令弟と、ことし國民學校二年生の康江さんたちの教育に専心されるのでした。

やがて大東亞戦争の勃發、日に日に緊張する航空決戦の様相に、一家は一郎さんがお役に立つ日を、どんなに待つたことか——

と、その長い緊張の日を思ひ出して語られます。

毎年五月といへば、瀬戸内海沿岸の魚屋さんたちにとつて、一年中をこの二月に縮めた忙しさです。美しい瀬戸の流れに、鯛や鱒が島々の間を縫つて一度に内海に押しよせます。「鯛島」とその名も嬉しい、艶やかな薄桃色のぴちぴちとした魚の群が濱一ぱいにあがつてくる中を、人々は顔をほころばして右往左往する。

威勢よく大量が生のまま市場に送られると、あとは手わけして、あのおいしい鯛のはまやきにされる。夜も晝も、一家總出で、瀬戸内の濱は嬉しい忙しさが續きます。

そのころのある日、とつ然、〇〇基地の一郎さんから「チチトハハトオイデネガヘズヤ」といふ電報を受け取りました。

——この忙しさでは——

さすがに酒井さん夫婦も吐息をつくばかりで、すぐには決心がつかねました。しかしともかくとあわただしく仕度すると、行く時間を電報でしらせ、内海を船でその基地へ急ぎました。

長い船路のひととき、乗客の立ちさわぐ聲に何の気なしに空に眼をやると、いま頭上を低く、たつた一機で何度も旋回してゐる飛行機は、まぎれもない海軍の新式戦闘機です。

「あつ、一郎だつ」

それに違ひない、顔こそみえないが、「きつと私達を空から迎へてくれとるのや」二人は夢中でハンカチを振ると、それに気がついたのか飛行機は、親しい挨拶のやうに、翼を何度も上下に振つてみせるのです。みると、その機からやゝ高く同じ型

の編隊がいかに僚機を待つてゐる様子で、ゆるく旋回を續けてゐます。

酒井機は隊長の許可を得て、しばらく隊列から離れ、父母を迎へる低空旋回だつたのです。

「——ほんまにあんな嬉しいことはありませなんだ。伴に遇ひに行く途中で、空から伴の出迎へを受ける——荒鷲の母なればこそと、わが身の光榮に、ほんに勿體なうなりましたんですん。」

青い海と青い空に明るい感謝をいつまでも投げ、船の絶え間ないゆるぎも今は心地よく、ふたりはやがて〇〇基地につきました。

夕方、小さな旅館の一室で親子三人はしみじみと語り合はれたのでした。

「入つてくる足音がしたと思ふたら、次の間に手をついて、『お父さんお母さん、今度は忙しいなかを、こんなところまで呼んで濟みませなんだ』といふ挨拶もちよつと見んうちに、すつかり落ちつきがでよつて、私は自分の子の背すじあたりを、しげくとみよりましたんです。」

最後となつたその日の思ひ出は、まつえ母堂の脳裡からいつまでも消えないのでせう。

「——お父さんが早速に、このさい電報入れるについては何か變つたことでもあつたんか、と聞きますと、『なに、そげなことはありません、萬事は上官の命令で動くけに、さきくのことはわかりません、たゞ——親の顔がみたかつたですけに——』
といふばかりです。

——ですがお父さん、と一郎は自分がこの前の〇〇大海戦に、行きそこなつたことをひどう残念がり、『わしも今度はどうでも大きい作戦に出て、思ふ存分働きたいんに、ラジオと新聞には氣いつけとつて、もし運ようあつたら自分も加はらせて貰ふと思ふてつかあさい。』といふのですん。

——そりやあ、行かせて貰はにやあ、どもならんな、——わたしは、あれの雄々しい氣持がようわかりますんし、こんなに出たう思ひよるのん、もし出なんで

このまんまになるんやつたら、親としてほんまに不憫でなりませんので——。どうぞ倅を思ふ存分働かせてつかさりませい、と心の中で神様におがんどりましたんです。

そしたら今度はわたしの方むいて、お母さん、——私から今更いはんでもようわかつとるでせうけえどが、と、ちよつとの間口をつぐんだあと、思ひきり云つてしまへ、といふ風に、どうせ遅かれ早かれ一度は公報が入るのやけえ、その覺悟だけはつけといてつかあされよといふのんです。決して泣いたりせんやう頼みますんと、そればかりが心配でならんといふ顔色をみたときは、かりにも自分の子にさう思はれよる、何といふだらしのないことかと、ほんまにわが身が恥かしいなつたんでございました。」

春の陽ざしがほの暖かい二階の一室で、一郎さんの思ひがそこに通つてゐるやうに、まつえさんははるかに海を眺め、そこで大きく息をつかれました。

休まぬ仕出し

面會から歸つて以來の酒井さん夫妻は、次々と報ぜられる海と空の大決戦が、あたかもわが家のものゝやうに、新しい緊張と自覺で日々の生活を送り迎へしました。

——大東亞戦争が始まつてから、もう七ヶ月はたち、若い空の勇士達は、廣い戦場で盡忠の血潮を流し、大東亞の雲を眞赤に染めてゐる。——

うちの倅もその勇士たちの誰に劣らう。私達は喜んで送り出し、息子も進んでその身を投げだしてゐるではないか、自分たちも決戦場にある息子に恥ぢない日々を送つて、今はたゞ、雄々しい武者振りのそのしらせを待つばかり——

その頃の酒井さん夫婦の心境は全くそのやうだつたのでせう。戦争勃發から何ヶ

月もたつた若鷺の留守宅の落ちつきや決意がよく想像できます。

さうした明け暮れがまだ幾日もたゝない六月八日、突然、軍艦マーチの旋律と大本營の發表は、この一家に一倍強く響きました。

ことに放送の最後の、わが方の損害、空母二隻の損傷と未歸還飛行機三十五機といふ發表に酒井さん夫妻は思はず「アツ」と聲をあげてしまひました。

——たいした戦だつた、一郎もどうやらこれに加はらせて貰ふとるやらう。それだが、何とか人並の働きをしてくれたやらうか、お役に立つてくれはつたか、——まづそれが心配だつたのです。しかしこれが、親の子に對する第六感といふものか、息子はきつと、この三十五機の中に加はつてゐると、もう動かさない事實のやうにそんな豫感をもたれたさうです。それから、たゞ、公表をばかり待つ氣持で、お店にみしらぬ人が立つたり、電報が來たりするたびに、今度こそとお母さんは緊張するのです。

御主人正一さんは、

「わたしは、〇月〇日に公表が入つてから、はじめてぐつすり何もかも忘れたやうに寝入りました。全くどうしたんか、それまではちつとも寝入れず、朝まで一睡もせんといふ日が続き、すつかりやつれてしまひましたけえが、その日以来、うそのやうにぐんぐんと肥りだしたのも、おかしい位でした。」

私はその言葉を、何とも言へない氣持で、聞いてをりました。公表を知つたとき、

——くるものがきたのだ。ひんばんな大地震に、あとから津浪がおしよせてくるかもしれないと、覺悟してゐたところだから、いま、それがやつてきても人々は、ことに一家の主婦が泣いてなどいられない——

その場合のまつえさんの態度は、これ以上はないと思ふほど落着いたものでした。

子供たちはどないしてゐるやらうか——二階に上つてしまつた十三歳の一政さんの後を追ふて、——部屋の隅で肩をふるはせ、うづくまつてゐる背中に、お母さん

の聲は凜としてゐました。

「これ、いまの場合、泣くといふのは一體どういふことや、みつともない、止めなさい——。なあお前は、兄さんの跡をつぎ、仇を討つといふ氣いなれんか！」

「ハイ、ハイ」

袖でつるりと涙をぬぐふと、しやくり上げる嗚咽を残して、「この母」の子はもう立ち上つてゐました。

海軍關係の造船所へ勤めてゐる次男正さんへ、知らせようかどうしようか、茶の間の柱時計の下でちよつと立ちどまつて考へ、こんなことで少しでも増産の手がゆるんだらあかん、あの子も覺悟してゐたこと、べつに取り亂すこともあるまい、しかし——

と、電話をかけてみると、

「あゝ、やつぱりでしたか——、とにかく仕事をすませ、ひけ時間に歸りませう。」やはり何もいふ必要はなかつた——まつえさんは胸をなでおろして、土間いつば

いに埋つた弔問客に應對しはじめました。

野良着をいそいで着かへ、汗と涙と一緒にたにつましくお悔みを述べる人たちに、酒井さん夫婦はおしまひまで一度も涙をみせませんでした。

「志願させた子が、戦死したといふて泣きよつたら、全国の少年飛行兵の家族の名折れになる。

立派な死場所を得て、母艦と運命をともにしたんじやけに、本人はどない喜んでるやらうか。それを親が今更めそく泣いていゝもんやらうか」

さう考へた御夫妻は、だからその日——丁度一年に一ぺんの氏神様の御祭禮日を、はて、自分たちの商ひはどうしたもんだらうと、ちよつと思案しました。人々の氣持を憶測したり、一瞬躊躇したあげく、

「うん、やらう。みながせつかく楽しみにしよるのに、この時局の配給戦士として、やたらに業務を休んでよいものか。」

と、驚く人々の前に、正一氏は決然とその日一日、庖丁をふるふ手をやめなかつ

たのでした。

花みちあふれ

昭和十七年六月五日——戦雲こめるミッドウエー島附近のわが母艦に、突然偵察機から、

「巡洋艦五隻とエンタープライズ型一隻から成る米艦隊、ミッドウエー北方〇〇哩を北上中」

と、勇士の胸を躍らせる素晴らしい情報が飛び込みました。

一郎一飛曹は、攻撃隊ではないのでその艦隊の頭上に、爆弾などをぶち込むわけにはゆきません。

しかし——また、く間に敵味方入りみだれての壮烈な戦場と化した海域で、小癩

にもわが母艦を襲ふ敵の攻撃機隊は引きもきらない。なにしろ敵は空母集團のほか
に、その近くの基地に大きな航空兵力を持つてゐるのです。

わが母艦めがけて狙つてきた第一次の敵雷撃機の大群を、一郎飛行兵曹達の〇〇
戦闘機隊は敢然とむかへ撃ちました。

その〇〇式戦闘機は、わが海軍が誇る最新鋭の優秀機で、氣の弱い敵などこの機
を見ただけで逃げだしたなどと逸話も残つてゐるくらゐ。しかし、この日の敵は米
軍の虎の子といはれるなか／＼の猛者揃ひで、素早く機先を制して、上方から機銃
の雨を降らせるわが荒鷲達の、右を抜け左に廻り、敵の機銃の應戦もなか／＼熾
す。

いまや、酒井機は敵三機をとらへて渡り合つてゐます。むしろ、敵の三機が束
なつて酒井機を圍んでゐるといふ方が本當かも知れない。操縦席の酒井飛曹の頭上
を、面前を、パツパツと無数の火の矢が飛ぶ。大型機で行動こそ遅けれ、敵三機の
射手はこぞつて、酒井機一機を目標にしてゐます。

あつ、目の前の一機がつひに黒煙をふき出した。火だるまとなつて墜ちてゆく機
に、残る二機は前にも増して酒井機に攻撃を集中します。續いてまたも一機を撃墜
すると、残る機は矢庭に逃げ足になり、我が母艦を沈めるつもりでもつてきた魚雷
を、あらぬ海面に捨てたまゝ、はうはうの體で逃げてしまひました。

手傷も負はず、意氣揚々と母艦に還つた酒井一飛曹の編隊は、間もなく第二次攻
撃に飛び出して、そこでもまた前に劣らない戦果をあげました。この海戦で〇〇戦
闘機隊の大きい手柄は、他艦の人たちをひどく驚かせたものですが、自分の搭乗母
艦が大きな傷を受けたのを、還つてきて空からみた一郎さんたちの氣持はどんなだ
つたでせう。

悲憤にたぎる烈々とした闘志はつひに最後のことを決意しました。編隊は降下せ
ずに再び海を渡つて飛んで行きました。二郎一飛曹は敵艦隊の頭上に引きかへす
と、戦闘機の方では叶はない敵艦撃沈を、自分たちの肉體をもつて果さうと、敢然
として敵〇〇艦に體當り自爆を遂げたのであります。

「思ふ存分働いたらしくて、あの子もほんまに満足しとることせう。私もすつかり肩かたの荷をおろしましたん。

ほんにわたしほど子供運のよいをなごはありませなんだ。

次男は、僕は兄あさんから二人分孝行するやう頼まれとるけえ、おつ母さん、安心して下さい、といひよります、それから何かと氣いつけてよう孝行してくれませんでの——。」

御夫妻のなほも屈くしない決意は、男の子は全部軍人に、女の子は軍人の嫁にと考へられ、すでに長女正子さんは土地の校長先生に見込まれて、その長男の陸軍少年飛行兵出身の若鷺さうに嫁がれました。

日本の國土の一隅に咲いたこの小さな花、酒井さん一家の赤誠と熱意は、種をこぼして、つぎ／＼とあたりにたくさんの花を咲きひらかせることせう。その花がいま國土くにに充ちあふれようとして、あゝ、戦ひの匂やかな勝利の日が眼の前に見えるやうな氣が致すのであります。

友鷺は語る

——ソロモン海戦、久恒吾市一等飛行兵曹とその母——

九州路

布哇攻撃の初陣から、第二次ソロモン海戦で自爆するまで、海鷲の奮戦した殆んど大部分の戦闘に加つて、素晴らしい戦績を上げた久恒吾市一飛曹は、その存分な戦闘經歷に多くの戦友から羨望の的とされてゐました。

九州は大分縣中津市の出身で、縣立中津中學三年で十六のときに乙種飛行豫科練習生を志願しました。

私は岡山縣の酒井一郎一飛曹のお宅を辭すると、夜行で眞すぐに九州路に向ひました。

朝もやにぬれた大きな市街地の驛にすべり込み、さつきからの閉ぢたり開けたり私のねぼけまなこの向ふに、もうそこが下關でありました。

世界に誇る海底トンネルをいよく私もくぐるのだ、と一寸ばかり氣負つてみましたが、汽車はあつけなく、他のトンネルと何の變りもない感じで、暗い穴のなかに入り込みました。けれども海の底と思ふせいか私には、汽車の車輪がシューツと涼しい水の音を絶えずはじきつゝ進んでゐるやうに思へました。

旦那トンネル位も——だから十分近くかゝつたでせうか、明るみに出るとすぐもう九州路の門司驛についてゐました。

下關——連絡船——門司——いままでの本州からのやゝこしいその経路には、たとへば下關の長く長いプラットホームは、いかにも大陸からの玄關らしい、北滿の防寒帽の兵士の列や、擔架に載せられた傷病勇士の姿など、それから、込みあふ大きい連絡船は、小さい海峡を歩きにくさうにのそりくと、水よりも他の船の姿ばかり幾つも眺めて進むなど、いかにも遠旅らしいいろくの匂ひがただよつてゐたものでした。汽車を待つ間の門司驛の女仲仕や、驛前通りのバナ、賣りばあさんのしやがれ聲などもなつかしい風景でした。

しかし、今は下關も門司も、たとへば汽車は静岡とか濱松とかといふやうに、何の表情もみないで、それに海さへも何處にあつたかわからず、ドン／＼と飛んでゆきます。

でも北九州といふところは、一寸の地域の間にも、とてもいろ／＼と複雑な面を持つてをり、港の町門司を過ぎると、そのかみの城下町だつた小倉は、高い煙突がいくつも伸びた工業地帯になつてゐて、鹿兒島本線をこゝで眞つすぐに進むと間もなく、八幡といふ日本一の旺んな鐵の町などを通るのですが、小倉から私ははじめての日豊線に乗りかへました。

この沿線は「裏九州」とでも云ひたい穩やかな地域で、鹿兒島線、長崎線の感じとはすつかり違つてゐました。

左手一帯は、瀬戸内海の出口に近いといふ青い海を眺めながら、何處までも平坦な田畑が続いてゐます。もし右手はるか遠くの山々を眺めることがなかつたなら、私はあやふく關東平野を走る常磐線と錯覺を起すところでした。

中津は、小倉から一時間半ばかりいつた大分縣の入口で、小さく古い都市らしく、狭い驛の前通りに、くすんだかまへの土産物店がずらりと軒を並べてをりました。有名な耶馬溪への通路となつてゐるのです。

久恒さんの御住ひは、こゝから小一里ばかり離れた上宮永といふ新市域で、細い道の兩側に草葺屋根がぎつしりとたて込んだ——さういふ所でした。

その一軒が久恒さんの家で、こゝにはもう七十五歳になる老父富藏さんと、母トクさんも六十五歳で、お二人きりの今度の私の訪問のうち最年長の夫妻でした。

お二人は、四十五歳になられる長男敏雄氏を頭に、五男二女の子持ちで吾市さんは末子でした。

半農半漁のとぼしい暮しのなかから、この大勢の子息を次々に教育され、それぞれ立派に成功させたといふだけあつて、このお母さんからはそのやうな感じを汲みとることが出来ました。

老婦人らしく一そ可愛いらしいやうな小さなからだに、鼻すじの通つた端正な顔

や、きりゝとしまつた口許などがしつかり者らしく、でも眼許や頬のあたりの優しさか、この人の慈愛深さを思はせます。

富藏さんたちは、もう隠居された老境のせいか、何か世捨人のやうにも淡々として、思ひ出とか、さういつたやうなことを何も委しく話してはくれません。壯年の人のやうなはつきりとした思慮をもつて語ることは、もう憶劫なかもくれません。

ろくに私達の前で云ひたいこともいへないお母さんですが、やはり「聖鷺の母」に相應しい、優しい立派な方でした。

間もなく、近くに住んでゐる四男元永富雄氏（國民學校訓導）が來られて、この母君の代りに思ひ出を語つて下さいました。

貧しい生活のなかで自分は食べるものも食はず、何一つ楽しいことも知らず、ひたすらに子供たちのために捧げつくし、その境涯のなかで絶えず念頭にあつたことは、子供たちを世間へ出して役立つ人間にしたいといふことだつたさうです。

だから最愛の末つ子、吾市さんの戦死を聞いたとき、トクさんの口をついて出た最初の言葉は「よくやつてくれた。これでわたしも世間様に對して肩身が廣うなつた。」と平然としたまゝ云はれたさうです。日本の婦人は、殊に年配のいつた女性たちは、平生はつましく、自分は何も知らない、わからないといふやうな顔をしながら、いざといふ時に當つて取るべき毅然とした態度を知つてゐたのです。

かうしたことを知り得たことが、私の今度の八つの訪問旅行での何よりも大きな收穫でした。

なくなつた食器

さて私は、歸京してから數ヶ月経つた七月のある暑い日、〇〇航空隊に久恒一飛曹の同期生で、無二の親友だつたといふ〇〇上飛曹をお訪ね致しました。

とくにその副官の計らひで、士官應接室でお會ひした〇〇上飛曹は、未だ少年飛行兵と呼びたい位の、いがぐり頭の中學生のやうな感じでした。

白い事業服の胸には、この頃の學校の生徒のやうに、上等飛行兵曹〇〇と名札がついてゐて、もう間もなく颯爽とした帶劍姿の准士官になれる方かといぶかるほど若々しいのです。

すつかり陽やけした顔は毎日大空を翔けまわつてゐられるからだらうと思ひましたが、そればかりでなしに、この方も布哇海戦以來つい最近までいくつもの航空作戦に出動して、南のやける空から近頃歸還されたばかりださうです。

「久恒とは、豫科練習生時代二年半の間、ずつと机を並べてゐて、それから別の所屬になつても、時折り遇つてゐました。」

これが海鷲氣質とでもいふのでせうか、親しみある笑顔を向けながら、言葉はとても簡単な、ぶつきら棒なのです。

「自分はどうも口下手ですから——何か聞いて下さい。」

と云はれるので、はじめはこちらから質問し、お話をいろ／＼と伺つてゐましたが、そのうちに初對面の垣根はすつかりとれ、海鷲らしくさつぱりとしながら、打ちつけて下さり、私はそこで少年飛行兵出身の若い海鷲の氣分に觸れ、思はず心よく數時間を過してしまひました。

口數の尠い方もしく、ポツ／＼と語つて下さいます。

「——あいつは、手荒く無口な奴で、入つたはじめのうちは、誰とも口をきかんです。よくあんなにも沈黙の行を續けてゐられると思ふくらゐ徹底したもんでした。」

手荒くといふ言葉は海軍士官の間でさかんに使はれると聞いてゐましたが、やはり搭乗員にも云はれてゐるのでせう。ひどく、とか、とてもとか、と調子も同じになか／＼びつたりした言葉だと思ひました。

「——そのうちに、教室で机を並べてゐる自分や、前の席の酒井——（筆者註、本書中の酒井一郎さんのことです）——たちとぼつ／＼つき合ふやうになりました。」

あいつは、初めから少し風變りな奴だと思つてゐたら、そのころからすることが何處か違つてゐたものです。

總員起しは大抵、五時か五時半ころで、大抵の者はその時間にやう／＼目が覺めるものですが、あいつはいつも三十分も前に飛び起きてゐました。

そのころは豫科練習部は今の「土空」(土浦航空隊のこと)や「三重空」ではなく、「横空」(横須賀航空隊)にありました。廣い隊内には小高い山があり山頂に雄飛神社といふお社が祀られてあります。

その頃の「豫科練」生にはみな懐しい思ひ出の地ですが、こゝに上れば、横須賀港内を一望の下に見下せるし、遠くに伊豆や房總の山々もかすんでゐるといふ、手荒く見晴しのいゝ所なんです。

ある朝、自分も奴に起して貰つてそこへついてゆきました。久恒は毎朝そこへ上つて、たゞ一人で宮城遙拜と、故郷へ向つて兩親へ朝の挨拶をしてゐたのだつたのです。

自分もやつたかといふのですか、アハ、ハ、ハ、。酒井なども率先してついでいつた組ですが、どうも早起は苦手の自分も、いつの間にか感化させられたものですよ。アハ、ハ、ハ、。

荒鷺は、自分の話はしたがないものなのか、ちらりと作爲のない謙虚さがほのみえて、何となく私は嬉しくなりました。

と、何かあわてるやうに〇〇上飛曹は話題を代へました。

「——いや、あいつは全く、自慢することの嫌いな男でした。みんなで寄り集ると、それ／＼成績のいゝ科目などを他愛もなく得意がるものですが、自分たちはあいつの口から自慢話らしいものは一度も聞いたことがありません。柔道は同期生中、まあちよつと手出しが出来ないほど強かつたですね。しかしあいつからは一度だつて、柔道談義を聞いたことがなかつたです。

とにかく、平生は居るのか居ないのか、わからないやうな目立たない男でしたが、さういへばこんなことがありました。

自分は分隊も同じ、教室も並んでをり、下宿も一緒でしたが、班だけは別だったので、そのいきさつは人から聞いたのですが、入隊して間もないある時、あいつの班で食器が一つ紛失したのです。

知つてゐられるでせうが、航空隊の食器は、みなニームの揃ひのもので、班長を中心に班毎に一つの卓を圍んで食べ、當番がその後始末をするのです。

それが一つどうしてもみつからない。軍隊では食器も兵器なのです。銃や劍と少しも變らない大切なものとして扱はれてゐるので、そんなだらしないことを覺えられたら、班長の責任ですから、——自分も今になつてそのやうな立場に立つた班長の苦しみがわかりますが、——やはり今後の教育上、はつきりさせとかなければいけない、といつて誰がやつたか、一向わからないので、班全體の責任といふことになつたのです。

われ／＼同期生を全部集めて、あるときその教班長は自分の班の者を揃へて前に出し、『これは班全部の責任だから、今からお前たちをみんな殴る』といはれたものです。

です。

と矢庭に——それは自分も並んでゐて、はつきり覺へてゐますが、久恒が班長の前に飛びだしました。と、續いて酒井も前に出ました。二人は何かもぞ／＼と變な態度でお互ひに睨み合ふやうな、貴様には關係がないとでもいふやうな、とにかく妙な表情でゐましたが、久恒がこのとき、大聲で口を切りました。

「教班長、その食器は、自分の當番のとき紛失したのであります。他の者には責任がありません。自分を處罰して下さい。」

そしたら續いて酒井も云ひました。
「教班長、それは久恒と自分とで紛失したのであります。今まで自分は隠してゐて濟まなかつたであります。」

それで二人だけが處罰されて、みなはのがれたことは云ふまでもありません。

自分はその二人とは無二の親友でありましたが、二人ともそのことについてはその後何も語つてくれませんでした。

しかし、他の者の話しによると、全くそれは二人の知らないことで、久恒と酒井はめい／＼、自分一人が責任を取らうと思つて、誰にも語らずその場に臨んだのですが、豈圖らんや、自分以外に別の者が飛び出したので、あとから口を切つた酒井が咄嗟にそのやうに云つたのださうです。

どうも自分の親友のことは、賞めにくいですが、何しろあゝいふ場合になると、手荒く肚の据つたことをやる奴でしたよ。」

私はその話しが作り話ではないかと一瞬、疑ふやうな氣になりました。私の書いてゐる久恒さんと、しかも酒井さんだけがそこに同時に登場してくるなんて、あまりに偶然だつたからです。

しかし、〇〇上飛曹は、敢へて私にそのやうな藝當をしてまで、喜ばせやうなんてそんな芝居氣のある人とは思はれません。眞面目な表情と澄んだ眼の色はさつきから少しも變りません。

ふつと私は、土浦航空隊のある班長のことを、とても鮮やかに思ひ出してしまひ

ました。

教班長——ふつう班長のことを、豫科練ではこのやうに呼ぶのださうですが、班長なんて、人をこのやうに殴つてばかりゐると、もし誰かと思ふとしたら、それは大變な間違ひです。

私は「土空」に、あるとき雛鷺の入隊日風景を見學にいつたことがあります。第一次、第二次の試験に合格して、この日晴れて集つてきた少年たちに、もう一度簡単な身體検査が行はれます。本當の試験のときから今迄に、もし何處か悪くでもしてゐないかといふのですが、情ないことに、そのときも視力が劣つてゐたり、目につかないちよつとした病氣などで、何人かの人か歸されることになりました。そのうちの一人を、二十二三位の若い班長が班に連れてきて、荷物を整理してやつてゐます。十五位のその少年はさつきから、頭も上げずに泣きつゞけてゐます。

「これ一遍で力を落すんじゃないぞ。少しづらゐの視力不足はすぐ直るからな。」
まだ頬の赤い班長は、少年の頭を撫で、肩をたゝいて云ひふくめてゐます。

「こんなところ、もう来ないなど、思はずに、また来年こい。いゝか、教班長は待つてゐるぞ」

少年は前にも増し、いまは聲をあげて泣いてゐます。あちらこちらから幾人もの下士官（他の班長）が集り、少年を圍んでしきりとなだめてゐます。さつきの班長は、預つてゐた荷物を、いゝか、大丈夫だな、と心配さうに顔をのぞきながら手に持たせました。尙も嗚咽を呑み、去らうとしない少年に、あゝ何と、今度は靴の紐を解き、履かせてさへゐるではありませんか。

「一回でへたばつてしまつては駄目だぞ。わかつたな。」

小聲でいつまでも何かなだめながら、その子の肩に廻した手はきつく抱きかゝへるやうで、丁度たつた一人の弟にでもするやうに、遠く一つの影法師になつてゆくのでした。

海上不時着

「大東亞戦争が始まるとあいつも布哇海戦に出動しました。

真珠灣で悠々と敵戦艦をやつつけると、翌日、あいつは〇機〇編隊で索敵に出動しました。

十二月八日に續いて、その日も手荒く天候が悪く、遠くまで敵を索めていつた久恒たちは、つひに途中で海上に不時着してしまつたのです。

水の上の不時着が、どんな有様かといふのですか。ではお話しませう。

飛行機が着水すると同時に搭乗員は、平生から身につけてゐる救命筏を抱へて、機體からいそいで飛び出します。

いつもはほんの小さく折疊まれてゐますが、それを波の間を泳ぎながら、ついで

なるふいごで空気を入れます。すると二米のドーナツ型の細長い輪にふくらみ、ま
ん中は網になつてゐるのです。そこで救助がくるまで遭難者は頑張るのですが、何
しろ太平洋の真中なんていふ所は、うねりが大きいので、筏の上の人間の存在なんて
いふものは、なかなかその表面に表はれることはありません。まあ五分間に一回ぐ
らゐのもんでせうかな。味方の救助船が近くまできても、さういふわけでなかく
見つからないのです。救命筏の上では、その波が高い所に出た僅か二三秒の間に、
何とかしてはつきりと、合圖しなければなりません。

食糧ですか。澤山ではありませんが、その筏には、ふだんから罐がついてゐて、
チョコレートやビスケットや鯉節のやうなものが入つてをり、まあ一寸位なら凌げ
ます。

久恒は運がよく、かうして数時間ののち、味方の駆逐艦に救はれることができま
した。

——いや、このくらゐのことに、海軍の搭乗員は驚いちゃいられませんよ。しかし

大海の上で救援に遭はないのも心細いが、折角来てくれた船が見つめてくれない時
なんか、まあ、ほんとに心細いものですな。アハ、、、。

自分は、あいつとは艦は違つてゐましたが、同じ第一線の搭乗員だし、殊に同期
生だし、やることは手にとるやうにわかつてゐました。

丁度自分も布哇から歸つてきて、間もなくあいつの家に近い〇〇に偶然行き合せ
たもので、ひよつと久恒の家に寄る氣になつたのです。御両親にあいつの奮戦ぶり
など、いろ／＼話してやらうと思つて、一人である日、訪ねてゆきました。いや別
にそれまでに行つたことはありませんが、番地を訊きながらゆけばわかるじやあり
ませんか。

さう、自分たちにしてみれば、わが家ほどでなくとも、まあ、同期の親友のおふ
くろなどといふものは、手荒く懐かしいものですよ。

いや、喜ばれましたね。久恒が歸るより早かつたもので、自分のおふくろよりひ
とのうちをみて、あゝいふ場合の母親の氣持などが、却つて身にしみてわかるもの

ですな。全く親孝行しなけやいけないと、つくづく思ひましたね、あの時は――。
とにかくそこで命拾ひした久恒は、それからどの作戦にも作戦にもどろく出動
しました。

布哇をみんなで粉微塵にやつつけると、艦はぐつと南に廻つて、濠洲ポートダー
ウインの空襲に参加しました。

それからソロモン諸島へも、その後の海戦ではなく、すでに三月に陸上攻撃をや
つて、戦果を上げ、それから更に遠く西へ廻つて、ついに印度洋の攻撃に移りま
した。こゝでも久恒たちはまづ、コロンの陸上攻撃をやり、更に四月六日には英
艦隊とはじめて遭遇して、重巡ロンドン型等二杯を轟沈させ、ついで四月九日に
は英空母ハーミスをやつつけてゐます。」

昇降機めがけて

「それからあの五月七八日の珊瑚海々戦にも、六月八日の東太平洋海戦にも、手
荒い戦果をあげて、いよ／＼一次、二次のソロモン海戦の出動となつたのですが、
その直前に自分たちは偶然にも〇〇基地で遇ひました。思へばそれがあいつとの最
後だつたのですが、その基地に同期生〇人がゐたもので、一夕みんな飲んだので
す。

何しろ久しぶりでしたからね。みんな忙しかつた第一線からの歸還者ばかりだ
し、まあ自分たちで慰安會をやつたやうなものです。あいつはちつとも飲めん
し、例によつておとなしく隅に坐つたきりです。それに手荒い美男子ときてゐるの
で、もう酔ひの廻つてきた連中が、何のかのといつて、あいつをからかふのです。

さういふ時の久恒はまるで少女のやうですよ。顔を紅くして、ただうつむいてしまふきりですからなあ、アハハハハハ。

それから間もなく、まためい／＼の艦に別れて、あいつらは一路南へ南へと出陣しゅつぜんしました。

そのころ、珊瑚海さんごかい戦後ちようど三月で、米蘭聯合艦隊はようやく整備を整へ、今までとは違つた非常に大掛りな攻撃の態勢で出てきたのです。敵はソロモン方面に少くとも三十隻を下らない輸送船に、海兵部隊約一個師團、一萬七八千名を連れてきたのです。逸早く飛行場を作り、飛行機を運び込んできました。

これを発見したわが方は、八月七日に、その敵輸送船と、護衛ごゑいの艦隊に對して戦闘を開始したのです。

これが第一次ソロモン海戦で、わが方は敵巡洋艦十五隻、驅逐艦九隻、潜水艦三隻、輸送船十隻を撃沈し、大破五隻、飛行機の撃墜破五十八に及ぶといふ大戦果を上げました。

一方敵の方としてみれば、折角海兵を上陸はさせたものゝ、この大損害を蒙りばなしで、上陸部隊を見殺しみころしには出来ない。その補給のためにまた艦隊を出撃してきたのです。

八月二十四日の第二次ソロモン海戦は、出てきたさういふ敵をやつつけた海戦で、われ／＼はまたこゝで戦艦一隻の撃沈といふ金星きんせいを得、空母二隻を傷つけたのです。

久恒はその海戦で、あいつらしく實に立派な最期を遂げてくれました。

彼は敵空母の攻撃をやつてゐたのですが、その番がずつと後の方だつたのです。御承知でせうが、飛行機からの攻撃などいふものは、他の何の戦闘でも同じですが、決してこちらがやつつけるだけで済むものではない、その前に敵からも熾しに射たれます。

殊に殿しんがり部隊は、はじめに攻撃に入るやつとちがつて、敵の攻撃もそこへみな集中します。久恒の機は敵戦闘機に包圍され、大いに苦戦しながら、しかし見事に爆

撃進路に入ると、悠々とその敵艦に向つて、弾をぶつつけました。指揮官機は、自機に續く久恒機が、再び舞ひもどつてこず、あつと思ふ間に敵母艦のリフトめがけて真さかさまに勇ましく自爆するのを見届けたのでした――。

いや、全くあいつらしいです。敵の機銃弾に重要部をやられて、今はこれまでと覺悟しながらも、自爆する場所を探したのでせう。リフトといふとつまり飛行機を甲板に揚げ降しするエレベーターのことで、これをやられたら、空母にとつては、正にどうにもできない致命傷ですよ。それにその艦の電氣が全部止つてしまひますからな。

あいつも、もう何も思ひ残すことはなかつたでせう。自分もちよつとそれに似た経験がありますが、やはりそんな氣持でした。莞爾として、といふ言葉があります、が、全くその一語に盡きますな。

――親友を失つたときの自分たちの氣持ですか？ さう、何といひますかな。とにかくちよつと、まあ一年に二度位は遇つてゐましたが、そんなときにも、

お互ひに生きるとか死ぬとかいふことは、ちよつとも口にしなかつたものです。第一線に出てゐるときは、そんな心境はどうやら通り越してゐるとでもいへるのでかな。いやはやどうも。

しかも酒井のときも、久恒のときもですが、友達の死はたまりませんな。自分も一緒に死んでしまひたいと、その度にもう我ながらどうしていゝかわからないやうになつてしまふものです。

――自分もまたどうしても第一線に出して貰ひます。あいつらや、大勢の散華した戦友のことを思ふと、どうしても敵とがかに渡り合つてゐなければ納まらない思ひです。

いや、これは自分だけでなく、内地にゐる搭乗員みんなの氣持ですがね……」
いつの間にか窓からさした西の長い日ざしが、卓の上に明暗二筋の縞を作つてゐます。

御勤務に差し支へなかつたらうか――今ごろになつてそれに氣がつき、あわて、

私は立ち上りました。

東京へも是非お遊びにいらしつて下さるやう、もう一度お目にかゝれる日を——と私が云へば、いしがぐり毬栗の若鷺は笑つてこたへてくれません。

あゝ、銃後の私たちは明日の生命を約束されてゐるのだつた、気軽に再會の約束が云へる——。戦闘員せんたうけんと非戦闘員の違ひをこんなにも生々しく思つたことは、嘗てなかつたことでした。

—それにしても、あいつ、あいつ、とまるでまたすぐ遇ふひとへのやうな調子はどこから出るのでせう。俺もすぐ貴様の傍に、あいつの傍にゆくのだから、といふ氣持が、いつの間にか、すつかりくくにじみ渡つてゐるからでせう。

若鷺の家々を訪ねて

大東亞戦争で不滅の手柄を樹てられ、雄々しく自爆された若い海鷺の家々を、ずつとこの一年半ほどの間、各地にお訪ねしてゐましたが、いまその報告をどうやら一書にまとめる運びになりました。

その間を振りかへつてみますと、さすがにいろくの感慨が沸いてくるのでございますが、御八柱の英靈の御加護と多くの方々の御指導によつて、こゝまで進みまされたことは、なんとも云い得ない感謝で一杯でございます。

去年の春頃のことでした。ある雑誌の用事で、ハワイ攻撃隊参加の御遺族を一二お訪ねしたことがありました。

年齒もゆかない若い息子たちを、空の決戦に捧げたお母さんたちの本當の氣持は、一體どんなものだらう。神鷺・聖鷺・猛鷺——あらゆる言葉を使つてもまだ足りないといはれ、世界中の人々を驚嘆させつゞけてゐる海軍航空部隊の「搭乗員」たち、わけても少年飛行兵出身の勇士たちは、一體どのやうな人柄なのだらう。——私は敬虔な感謝や、もの云へば先に涙が溢れてしまうやうな哀悼のなかで、何かそれらの本當のものに觸れてみたひ思いのみ致しました。

その訪問で私のうけた感銘は果して異常なほど大きなものでした。何かの機會に、その日の思ひを〇〇中

佐や〇〇少佐にお話ししましたら、誰方も一様に、深い面もちで共感して下さり、殊に〇〇中佐は、その場で、それらのことを一書にしてみました。仰有いました。

私は思ひもかけないことながら、その言葉に勵まされ、その後もずっと〇〇航空隊の高橋俊策中佐や航空本部の教育部では清水洋中佐や全室あげての御援助を賜はり、大本營報導部の富永謙吾中佐や、土浦航空隊の原田種壽中佐、その他各地の海軍機關の多くの方々の御鞭撻や御指導のもとに、それ以來私の訪問行は、牛のやうな歩みではございましたが、南へ、或は北へ續けられたのでございます。

さて私は、自爆された數多くの勇士の中から、この方々を書かせて頂きますのに、別にはじめから、お母さんの優れた方を探したのではございません。ただ最初の偶然の二三の訪問で、優れた武勳の影には、きつと優れた母心があるといふことを感得した故に、自信をもつて、何の下調べもせず、真直ぐに向つていつたのでございます。

その結果はこの一書を読んで頂ければわかると思いますが、不器用な私は、ただ事實に真正面からぶつかつただけで、そのほかに何の脚色もしなかつたのでございます。こゝには四十臺、五十臺、六十臺のお母さん達を紹介してあり、年齢からくるそれぞれの生き方や持味のちがひは、若い世代の私たちに、いろ／＼なことを教へてくれると思ふのでございます。

といつて、では荒鷲の母のみが、何もはじめからとくべつに優れた女性であり、立派なお母さんばかりだつのでないことは勿論でありませう。

幼い身心のまま飛び込んだこのひとたちの子息は、航空隊生活でどんなに立派に逞しく成長していつた

か、その變化を誰よりも早くしつかりと知つたのは、やはりそのお母さんたちの筈です。

負ふた子に教へられる——心清い母心は、驚嘆の眼をみはりながら、すぐに息子について立上りました。いつのまにか、息子の歩調に揃つて、真直ぐに、美しい歩みを歩んだのでありませう。

私の、最初の、知りたかつたことへの解答は、このやうにして與へられました。

世間の、もろ／＼の荒鷲の母への讃嘆は、だから今後も、全女性が等しく享受し得るものですし、肇國三千年の祖國がはじめて遇つた危機に、敢然と當る防衛の劍は、わが子荒鷲の名において、私共女性も共に振ひうる大いなる光榮であると思ふのです。

讃へられるもの。それは日本教育の眞髓を發揮した海軍少年飛行兵教育であり、その中に入つて素直に立派に自らを高め得る全日本の少年であり、またわが子を通じて、常に優しく勁い日本の全母性でなければなりません。

若い世代の貴女たち——こそはこの光輝に充ちた日本の荒鷲の、姉として妹としての高い誇りのなかに生きてあるひとたちです。まして次代の母としての光榮ある日を思ふとき——若い日の歩みはいつも豊かであり度ひと思ふのでございます。

以上のやうなことが、この本をしたゝめつゝあつた私の祈りであり、訪れ終えて歸つてきた折の私の思ひでもございました。

もちろん力弱い私には意圖のみ強くして、何ほどのことも達せられなかつたのを心苦く思ひます。私ははじめに、英靈の御加護と申しましたが、身心ともに弱い私には、この仕事のなかばに何度ペンを投げようと

思つたかしれません。もう駄目だ、と深いため息をついた後、きつと不思議のやうにも、眼前の道が開けてくるのでした。そのやうなことが度重なり、私はいつのまにか、はつきりと英靈の御導きを信じるやうになつたのでございます。それからもちろん、八軒の御遺族から賜はつた御厚意と、前記海軍部内の多数の方々
の終始變らぬ御援助、といふよりは、いつもこちらの思ひもかけないやうな至れりつくせりの御援助、御配慮を思ふとき、この書は私だけのものしたものではない、せめて今は、若い友の一人にでも多く、空の決戦とその戦士たちに思ひを馳せて頂きたいと、自分の力の小ささをかへりみるのみでござります。

昭和十八年九月大詔奉戴日に

藤村多江

(242)

大東亞戦争が勃發するや、壯烈果敢なる體當り戦術で敵を戦慄させ自爆した若鷲たちと、彼等を育て上げた母とについて書きまとめ、せめて紙碑を作つてあげたいと著者からの話をうけたとき、私はその意義あることに賛成した。

そこで著者の超人的な努力によつて、南は九州から北は東北まで各地を廻り、一軒一軒遺族を訪問し、その母と亡き若鷲のを中心にして、日誌、手紙、遺書等の貴重な資料が発見されたのであつた。

出てくる若鷲は、まづ布哇大空襲にはじまり、最近のソロモン海戦に至る大東亞戦争の各大战に加はつて、優れた武勳をたて、雄々しく自爆して行つた代表的若鷲である。

海軍少年飛行兵出身のうら若い勇士たちが、世界戦史を變貌させるほどの戦果をあげたのであるが、この書はその海鷲の裏面物語りで、凛々しい若鷲と、ひたむきに育てあげた母とのいつくしみや尊い姿を克明に描いてゐる。

この書の八人のお母さんたちは、決して定つた型ではない。生活の上でも、知識階級あり、農

(243)

婦があるかと思ふと、職業婦人があり、料理屋のおかみさんも出てくる。

この人たちは決して泣かないといふ、いはゆるしつかり者ばかりではない。泣いて泣いて泣き明かす可憐な母心が、そのなかから雄々しく立ちあがらうとしてゐる姿は、思はずほろりとさせられるのである。

著者は柔弱な身體を鞭うつて、若鷺につづく青少年を兄弟にもつ、若い娘たちへ捧げる本書を完成するために、静養すべき身體に注射し、全國を奔走し、熱心と至誠によつて、かきあげた本書をいま読んでみて、偉大な若鷺たちとその母たちへの姿に感動するとともに、一種の壯烈な感じを覚えるのである。

今や戦争は愈々熾烈な様相を呈してゐる。空の御楯たる少年飛行兵の、よき姉であり、よき妹である讀者の皆さんに望むところは、やがて逞しき若鷺のよき母であつて貰いたいといふことである。本書の完成に我々が援助指導した所以もここにゐるのである。

昭和十八年八月

海軍航空本部

海軍中佐

清

水

洋

若鷺とその母
(出版會承認)
320273



昭和十九年二月一日印刷
昭和十九年二月五日發行
一、〇〇〇部

定價 二圓
特別行爲稅相當額八錢
合計二圓八錢

著者

藤村多江

發行者

大島敬司

印刷所

愛宕印刷株式會社
谷本正
(東京一三五)

發行所

會員登錄番號
一一〇一四六

興亞日本社

振替東京六七六四一番
電話銀座二二六四番
五二一五番

配給元

東京都神田區淡路町二丁目九番地
日本出版配給株式會社

イサワ | 17

口發行



甘日

書圖軍海・社本日亞興

倉町秋次著 文部省推薦 空の少年兵	倉町秋次著 日本出版會推薦 空の少年兵戦記「灯」	大本營海軍報道部編纂 海軍戦記 1	大本營海軍報道部編纂 海軍戦記 2	大本營海軍報道部編纂 海軍戦記 3	大本營海軍報道部編纂 海軍戦記 4	海軍航空本部監修 海軍航空戦記 1	海軍航空本部監修 海軍少年飛行兵受驗本讀	清閑寺 健著 文部省推薦 軍神を生んだ母	間瀬一惠著 海軍省推薦 大空の遺書	大本營海軍報道部編纂 愛國詩謠集
ハワイ海軍、マレー沖海軍で世界の視聽を乗め より果立つ迄の全生活記	海軍の苦闘育ての親、倉町土空教官が、教へ子の 殊勲を描く、迫る師の愛も、涙く、教へ子の 魂を動かす、共に不朽の空の少年兵戦記。	海軍の大東亞戦史第一輯。ハワイ海軍戦より印度 洋作戦までの壯烈史を、皇軍の戦果の記録。	第一輯以後、即ち珊瑚海々戦より南太平洋の死 闘戦に至る作戦と戦況記録。開戦以來の作戦 過一覽表と戦局地圖を添へて完結。	ソロモン海戦以後の諸海軍特戦、提督の散華 第二特戦隊他殊勲者感状等の特輯に、戦局要圖新 版並に作戦経過一覽表を附す。	レンネル島沖海戦以後の各海軍、航空戦、夜戦 及壯烈なる東、南太平洋方面の奇戦記、雄偉 なる全線作戦、山本元帥の散華等を放む。	開戦時より繼續部隊と協力、或は航空部隊軍 海軍航空部隊不朽の戦記。	官制の改革による少年飛行兵の最新最良の受驗 讀本である。志願の仕方、受驗問題、検査待遇、 進路等を親切平易に海軍航空本部監修。	軍神が散華してから奇しくも一周年の十二月八 日、文部省の推薦となつた書。軍神の少年時代と 母を描き感激に満ちた良著。	遺児と共に、夫の遺訓を守り、武人の妻として の覚悟を示し、夫の死闘を憶ふ切々胸をうつつ 海軍故問少年未亡人の長篇手記。	開戦以來、赫々たる海軍の戦果に感激した國民 の愛國の至情は、詩歌となつて歌納されたこれ に現詩謠の團體獻詩を加へた珠玉篇。
千・一五六	千・一九八	千・〇八五	千・〇八五	千・一三〇	千・一三〇	近刊	千・〇八六	千・一五八	千・一五八	千・一五〇

一四六七六東京替振 區町麴都京東
四六二二 盛銀話電 社本日亞興 區町麴都京東
五一二五

709
486



唯

賣價 2.18



